

# 「生き残ってからの悲劇だった」 対馬丸映画「銀の鈴」

## 24日 総文センターで地方初上映

沖繩から本土への疎開船「対馬丸」撃沈65周年を記念して制作された映画『銀の鈴』対馬丸より、今を生きる君たちへ』が24日、津市一身田上津部田の三重県総合文化センター内、中会議室で上映される。①10時半②14時(開場は各30分前)。主催＝銀の鈴上映委員会。後援＝対馬丸記念館・(財)対馬丸記念会。協力＝三重映画フェスティバル実行委員会。



1944年7月、サイパン陥落。日本軍部は沖繩決戦に備え、非戦闘員である老人、女性、子供の疎開を沖繩に指示。8月21日、炎天下の那覇港から疎開船3隻が本土へ向け出港。そのうちの1隻が対馬丸であった。8月22日鹿児島県・悪石島の北西10㎞地点で米潜水艦ポーン号の魚雷攻撃を受け、対馬丸は1418名(11)も海中に沈む。

辛くも助かった生存者たちは緘口令がしかれ、沈没の事実を誰にも話すことができなかった。「生きてからが本当の戦争だった」――生きてなお戦争に翻弄されていく生存者の姿を描いた本作のもとなった戯曲「銀の鈴」は2000年7月に初演。その後、改訂され2004年に再演、2007年によみうり文化ホールで3度目の公演を行い大きな反響を呼んだ。

事件をきっかけにバラバラに引き裂かれる家族、戦争のために出会う人たちと別れる人たち。生き残ってからも戦争に巻き込まれながら必死に生きてゆかなければならない姿を通して戦争の虚しさ問いかけ、戦争によって亡くなった方々に対して、今を生きる私達に何ができるのかを考える機会になればと願っている。また「『癒しの島』と謳われ、本土からの旅行者が絶えない沖繩だが、その言葉の裏には途方もない代償が払われていることを我々、本土の人間が見ることはあまりない。出演者のほとんどが本土出身だが、そのヤマントンチュウである子供達が対馬丸事件を知り、沖繩問題に触れることが、未来を背負う根本的な力になると信じる。沈没から65年、数少なくなった生存者の耳には、今でも真つ暗な海に響く叫び声が聞こえるという。この映画で一人でも多くの人が事件の事実を知り沖繩の平和について興味を持ってもらえれば、この上



役の挨拶や上映後のアフタートークもある。入場料は大人1000円 中学生以下500円(予約優先。定員に達した場合は入場を断る場合あり)。申し込みは同上映委員会072・8883・7941。